

「やわらかな」国家主義・軍事リアリストの歴史像: 岡崎久彦氏の三冊の著作を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000409

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「やわらかな」国家主義・軍事リアリストの歴史像

——岡崎久彦氏の三冊の著作を通して——

戦後、平和と民主主義を守る護憲運動の主要な敵は、長い間、自主憲法というような形でいわば右からの体制変革を企図する復活した軍国主義者、大日本帝国の亡霊・右翼天皇主義者、しゃちこばった戦前の超国家主義者などというようなイメージであったろうと思います。事実、そのような残存勢力が今なお存在し、自民党などの一部に大きな影響力を改憲勢力という形でもっていることもみのがしてはならないでしょう。しかし一方では、憲法論争は回避したまま、この平和と民主主義の体制を守るために、国際的には日米安保体制を肯定し、アメリカとの協調外交の上に応分の防衛努力をしなければならぬというような新たな体制擁護派のイデオロギ

1、いわば現実主義という名の「やわらかな」国家主義が六〇年代以降台頭し、日本の高度経済成長と共に一部の保守勢力の中に大きな位置を占めたことも事実でしょう。ところが七〇年代を通じてのいわゆる日本の「経済大国化」と米・ソデタントの破綻は、アメリカからの経済大国にみあった防衛努力（実は対ソ抑止力）の強化という要求をつきつけられるようになります。そして八〇年代には、ついに同じ現実主義者からも、米・ソの軍事バランスを絶対視し、軍事情勢からのみ防衛政策を構築して行こうとする危険なグループだとされる「軍事リアリスト」とよばれる人々が登場してきます。

『文芸春秋』八四年四月号 永井陽之助論文）

外務省の高級官僚・岡崎久彦氏はその代表選手とみなされています。むしろ平和憲法擁護の護憲派にとっては、こちらの方が手強い相手なのかも知れません。何故なら戦前の超国



家主義的世界観の反動としての「観念的平和主義の軛」を云云し、「いずれにしても今後日本民族が、国際情勢の客観的な認識を過たず、その上に立って常に現実的な政策を維持出来るようにして行くためには、もういい加減に、戦時中の偏向とそれに対する反動としての偏向という作用・反作用から回復して、国際情勢について冷静客観的に判断できるように環境を作るよう、逆に言えば、新たな偏見や制約が生じるのを排除するよう努力すべき時期に來ていると思います。」(『國家と情報』刊行本、九頁)というように、「観念的平和主義」の解体を主張しているからです。しかもその根底には、日本の反戦平和運動に対して「安保反対や自衛隊廃止を叫ぶ野党・進歩的文化人、マスコミの中で、どのくらいの割り合いの人がほんとうに理想主義的な反戦論者であったか、どのくらいの人が、共産圏の戦略戦術の一つとして、まず対米協調路線の破壊を企図していたのか、これは今でもはっきりとは見分け難い所です。」(『同書』一八一頁)というように、平和運動はソ連を利するというような戦略戦術の観点からするところの反ソ・反共主義的な認識を隠していません。柔らかな國家主義の表情のうちには露骨な反共主義があります。日本外交を決定する外務省の中樞部あたりにいる人が、今どのようなことを考えているのかを知るためには、岡崎氏の本は極めて良い参考となります。

ところで、外交官が自己の歴史観にもとづいて著述をものすることは必ずしも珍しいことではないようです。日本史を例にとつても、イギリスの外交官オールコックの『大君の都』や、アーネスト・サトウの『一外交官の見た明治維新』(いづれも岩波文庫)などが幕末・維新史研究の貴重な回想史料とされていますし、日本の外交官を例にとつても、陸奥宗光の『蹇蹇録』は、日清戦争当時の外交当局者の記録として一級史料にあげられていることは周知の事実でしょう。また時代を下ると、いささか格はおちますが、太平洋戦争開始直後の一九四二年(昭和一七年)には、外務省調査局長谷川了氏が『日米開戦の真相』なる本を出し、日米開戦の責任はアメリカにあることを論証しようとしています。外交官の著作には、自己の赴任地での印象記や文明批評を目的としたもの(前二者)、自国の外交戦略や戦術の正当化を目的としたもの(後二者)の二系列があるようですが、ことに後者の場合は自国の外交政策の正当化を過度に強調する傾向があることは否定できない事実でしょう。

現役の外交官である岡崎久彦氏が、韓国での大使館勤務の合間に長坂寛のペンネームで書いた『隣りの国で考えたこと』(日本経済新聞社、一九七七、のち中公文庫、八三年)が前者の系譜に属し、外務省調査企画部長時代に出した『國家と情報』(文芸春秋社、一九八〇、のち文春文庫、八四年)、『戦

略的思考とは何か』(中公新書、一九八三年)などは後者の系譜に属するといつてよいと思います。前者と後者の目的意識からの違いでしょうか、両者が同一人物の筆になるものだとはいえないとの感想をもらした人がいます。たしかに、『隣りの国で考えたこと』のあとがきでは、「この間(注一九七三〜七六年)の韓国の政情と日韓の関係は文字通り波瀾万丈であつたが、私の置かれた立場もあり、またもともと本書の目的は目前の政治現象ではなく、その深い背景としての両国の歴史と文明に立ちもどつて、日韓関係を考えようということにあるので、政治問題に深く立ち入ることは避けることとした」とあるのに対して、一方では、「日本を取りまく国際環境の中の主要プレイヤーである米国、ソ連、中国、韓国、北朝鮮について、それぞれの国の歴史、文化、伝統の上に立つその国独自の発想の型と行動の様式、並びにそれぞれののがれられない地政学的、権力政治上の国際環境を出来るかぎり明確に把握しようと努めた。」とする『国家と情報』あとがきの態度や、「私はここで一つの試みとして、国家戦略論のいちばん基礎的な事実関係である日本の歴史と地理から始めたと思います。そして最終的には現在の日本をとりまく戦略的環境ができるかぎり客観的に解明されることによって、日本にとって何が必要かがおのずからわかってくることを期待します。」という『戦略的思考とは何か』の「はじめに」での

べられているようなものとは調子を異にするのは当然のことでしょう。しかし三著を通して歴史・地理的な観点を重くみること、イギリス仕込みのリベリズムを根底に自ら現実主義・保守主義をなりのり、常識的なセンスを尊重する語り口、「です・ます」体のやわらかな会話文体にもかかわらず、その論理は鋭くタカ派的である点など、いくつかの共通点もみのがすことはできません。

本のカバーの著者紹介や新聞の外務省人事の記事などによれば、岡崎久彦氏は一九三〇年、大連の生まれで、一九五二年には東大法学部在学中に外交官試験に合格し、外務省に入省、一九五五年にケンブリッジ大学経済学部を卒業、イギリス、フィリピン、フランス、アメリカ、韓国の大使館勤務を経て、中近東アフリカ局、防衛庁参事官、駐米公使をへて、外務省調査企画部長、一九八四年七月から情報調査局長をへて一〇月には五四歳でサウジアラビア大使という華麗なる経歴のもち主です。外務省はえぬきのエリートであることは疑いようがありません。このような氏が現在の体制の擁護派であることは当然でしょうし、氏自らが情報責任者は現実主義と保守主義でなければならぬとのべています(『国家と情報』恐らくこの本で最も頻出するキーワードはこの二語でしょう)。

従つて、岡崎久彦氏に体制擁護派のレッテルをはって(ま

さに中味もその通りだと思いますが)、いかに現体制擁護派であるかということのべたてても、それは氏にとつては名誉にこそなれ、何らの批判的機能も發揮しないことになるでしょう。しばしば官僚の属性として陰性の権謀術数を得意とするというような日本の風土から考えるなら、恐らくは多忙にもかかわらず何冊かの著作をものにして外務官僚として現体制を支える論理をきわめてソフィステイケートされた形で(良く、ええは洗練された、悪く、ええは悪すれした)のべている氏は、日本の官僚の中では異色の存在だといえるかも知れません。恐らくはイギリス風の民主主義と近代経済学を身につけた岡崎久彦氏は、公開的な論争をきらう人ではなからうと思います。ここは一つおよばずながら論争を挑むようなつもりで、氏の歴史像の枠組の強さと弱さを指摘したいと思えます。

岡崎久彦氏が外務官僚としての国家戦略論の観点から発想しているとするれば、私は市井の一民間人として、世界市民の立場からの民間戦略論を提起する責務がありましよう。しかしながら私自身の力量の限界からも、また、一応朝鮮史研究者という私自身の専門性を生かす意味からも、歴史像というようなある限定した分野での論争を挑まざるを得ません。まあおきが長くなりました。まずは著書の発表順に従って『隣の国で考えたこと』から考えていくことにしましょう。

『隣りの国で考えたこと』は、初め長坂寛のペンネームで文芸春秋社の雑誌『諸君!』に一九七六年八月から「韓国便り」として連載したものを日本経済新聞社から出版し、さらには中公文庫に本名で収録したとあります。出版の翌年には日本エッセイスト・クラブ賞を受賞(一九七八年)するほどの名文(?)で書かれています。また在日朝鮮人研究者の李進熙氏や姜在彦氏から、「心の暖まるもの……韓国の現状分析と将来の見通しが冷静であるばかりでなく、隣国の歴史や文化、それを創りあげた人びとについてよく知るのは日本をよく知ることになるといふ姿勢が一貫していて、比較文化論としてもすぐれている」(『三千里』三六号、編集を終えて、李進熙)とか、「わたくしは日本経済新聞社からの刊行本を一読して、少なからず感動したばかりでなく、日本外務官僚の有能さ、その勉強熱心さに舌を巻いたものである。……政治であれ経済であれ、ここ日本ではこと韓国にかんする限り、暗く書くことが「進歩的」であり、結果的にはそれが偏見を再生産しているのだが、本書の読後感はずつにすがすがしいものであった。是非一読をすすめた」(『同』三七号、読書案内、姜在彦)と激賞されるほど、それなりに内容的にもす

ぐれた見識を示しています。

「日本の隣国である韓国のことを書くというのに、まずフィリピンの想い出から始めるというのは突飛な、すくなくとも迂遠な感じを与えることは避け難いと思います」という書き出しで始まる本書は、アジアの国々にとつての歴史や独立ということの大切さということから説きはじめ、フィリピンと日本とのアンティパシー（相互嫌悪）を例にとりながら、日本と韓国（著者は一貫して韓国の語を用いています）が、この場合などは南北を含めた朝鮮全体を考えてもよいでしょう）の相互嫌悪のそもそもの原因は、日本の朝鮮に対する植民地支配にあつたことを率直に認めています。

「民族の独立というものが、十九世紀でも二十世紀でも、どんな無教育な普通の民衆によつても、いかに深く受け止められてゐる大事なことであるか、植民地を経験しない日本人には想像を絶するものであり、そのような事例を見るたびに、私自身冷水を浴びる気がします」（『同書』文庫本一五頁）という認識や、「我々として忘れてはならないことは、これをすぐ韓国人の国民性に帰することなく、その背後にある日韓の歴史の重みに想いを致すことであります。民族と民族の関係も個人の関係と同じで、生まれつき性格的に相容れないということはないでしょう。ある事件を契機にどちらかが他方に対して特殊な感情を抱くようになったという事実

関係を正確に把握することが大事であり、そして、日本は近代史の過程の中で、韓国やフィリピンに対して多分に責任のある能動的な動きをしてきたということを深く認識することが必要であります」（第一章結論）というような自覚は、岡崎氏が尊重する所の自国に対する客観的な自己認識に至るものの方と見ることができよう。

しかし一方では、現実の問題に関しては、「最近のフィリピン、韓国、タイの政情は、俗にいう『政権の維持』云々というような単純な問題でなく、戦争前の日本がまさにそうであつたように、近代化が完成する一歩手前にあるこれらアジア諸国の、政治的・社会的ジグザグ現象の一つとしてとらえるべきであります」（一三頁）というような個所にみられるように、先進国側多国籍企業の現地支配層との結合による開発独裁というような観点はさらさらなく、そもそも戦前の日本を否定的にとらえるという意識が明確ではありません（この点は後でさらに検討します）。従つて過去の日本と朝鮮に関する歴史的反省においても、歴史上の仮定の話としながら、「もし日本が、韓国の独立と近代化を一貫して支持し、その政策の枠の中で金玉均や朴泳孝（注 一八八四年の甲申政変の中心人物たち、開化派）などという立派な人々を盛り立てていっていただければ、もともと近代化の大きな流れが韓国の政治社会の基調となる条件は充分にあつたことですから、韓

国の民心が一変して、従来の清国に対する事大思想から、日本と協力しての近代化する方向に流れた可能性は充分あったと思います」(四三頁) というように、一貫して近代主義的発想からの甘い仮説となっています。歴史の冷徹たる事實は、朝鮮におけるそのような近代化の可能性の芽を、近代という時代に踏みつぶしていった張本人こそは、岡崎久彦氏が現実主義外交としてはめたたえてやまない日清・日露戦争を前後した日本の帝国主義外交であったわけで、歴史を好む現実主義者の氏がそのことを知らないはずはないでしょう。

とはいえ、日本と韓国との相互嫌悪のもっとも根本的な原因は、日本側の韓国に対する無知と偏見にあり、それを正さない限りはどうしようもないという第二章の「日本人の常識の空白」という章の論旨などは、細部では色々問題があるものの率直で好感がもてます。義兵將崔益鉉や安重根、李舜臣の人間像を描きながら、日本が朝鮮を植民地化することによって日本の朝鮮史像にゆがみや空白が生じたこと、(ただし戦後の空白を山辺健太郎氏の本などをあげながらマルクス史観のせいに行っている点は納得できません。むしろ公教育における歴史教育の問題でしょう)の指摘などは、外交官の姿勢としても好ましいものでしょう。そればかりか、日本と韓国のそれぞれの民族のアイデンティティー(日本民族とは何

か、韓民族とは何か——著者の注)を言語学や形質人類学、歴史学の該博な教養を駆使して論じた部分は、アマチュアのわか学問とは到底思えないすぐれた視点があちこちにあります。本筋とは離れますので詳論はしませんが、印欧語族の研究を中心として発達した音韻論中心の比較言語学的方法を日本語・朝鮮語の系統論に適応させることの無理の指摘(第三章)や、日韓同祖論が植民地期の創氏改名にまで至ったことを例のない愚拳と批判している点、福田徳三の朝鮮民族劣等論に対して「日本と韓国の発展の差を封建主義の発達の差に求めた点はたしかに理論的でもあり、また当時、後進民族を植民地化して文明の恩恵を与えることを、white man's burden(白人の厄介な義務)を負うことと考えていたヨーロッパの思想から考えれば、その時代としては必ずしも奇矯な説ではなかったのでしょうか、韓国の側から言えば、日本人と同じような顔をしていて、長い歴史で対等に付き合っていたのに、近代化に一步遅れたために劣等民族扱いされたその無念さ、屈辱感、怨恨は想像にあまりあるものがあります」(一四七頁)と批判する見識や、在日朝鮮人問題に関しては、「日韓関係の最後の癌で、この解決なくしては真の日韓友好協力は達成できないのではないかと思っています。これは、植民地時代が残した最も大きな未解決の問題というところもありますが、もっと具体的な問題として、日本で差別の実態を

体験して帰る韓国人がいる限り、韓国人の反日感情は今なお、再生産され、増幅されていくからです」(一五四頁)というように、いかにも外交官らしい発想が気になります。結論としては隠当なものでしょう(ただし癌という言葉の方が気にかかるので、後でまた論じます)。その他、古代からの日本と朝鮮の交渉史を考察するにあたって、近代以前の長い歴史のほとんどの間は本当に良い隣人であったといえるかどうかというような素朴な疑問から出発して、統一新羅成立以来の一〇〇〇年にわたる不和の一筋縄ではいかない関係という結論に至る過程、また日本と朝鮮の歴史の岐路を朝鮮における高麗初期以降の中央集権成立と、日本における封建制の成立の違いに求めていく手法など、必ずしもオリジナリティ(独創性)があるという訳ではないのですが、専門家の書いた難解な歴史叙述よりも平易で説得力があります。李進熙氏や姜在彦氏が敵ながらあっぱれという気持でしょうか、日本の外務官僚に舌を巻いてしまう気持もわからないではありません。確かに岡崎久彦氏の該博な知識にうらづけられ、かつ問題意識にあふれた自由な歴史叙述は、専門化した戦後の歴史研究のある弱点をついています。プロ・アマの妙な区別なしに学ぶ所は大いに学ばなければならぬでしょう。しかしながら原勝郎の『日本中世史』(明治三九年)をひきながらの岡崎氏の次のような発言「古い本ばかり引用し

て恐縮ですが、私はどうも歴史は明治のものの方がよいように思います。韓国史については、既に述べたように植民地三十六年、戦後三十年の空白があって、今でも明治四十五年の林泰輔の本が、歴史の見方の客観性という意味ではいざばん信頼が置ける状態ですが、韓国史に限らず、日清、日露戦争後の愛国主義的偏向四十年と戦後のマルクスの偏向三十年の空白というものは、日本史の多くの分野にも言える場合が多いのではないのでしょうか」(二四五頁)に至っては、いささか調子にのりすぎて馬脚をあらわしたといえるかんじは否めません。岡崎氏の著作にはいざばんも共通していますが、日露・日露戦争頃までの「明治の栄光」を高く評価し、その後はその二つの戦争の成功によって驕慢になり、国家理性を失って失敗した、戦後はまたその反動で過度に観念的な平和主義に流れてしまっているというような歴史観があるようです。国家エゴイズムを本領とする外交政策に関してならばいざ知らず、玉石混交の歴史の著作にまで、氏の自由主義的な史風好みはともかく、十把一からげにこのようなレッテルをはられてはたまったものではありません。

本書は一見、イデオロギー的には無色のようですが、随処に反マルクス主義的な言説はみとれますし、もともとイデオロギー的な部分は最終章の「近代化の神話」の部分でしょう。

「ただ、ここで私が自らの反省も含めて申し上げたいのは、この一事をもって、中世以降日本の歴史が、いわゆるアジア的停滞と訣別して西欧的な進化の過程を辿り、韓国や中国よりも進んだ段階を歩んだという風に考えて、他のアジア諸国に対する優越感を培ってよいのかどうかという問題です。近代化についてはもう勝負がついた問題で、日本が近代化競争で勝つたことは少なくとも現在までの段階では疑う余地のない事実です。……しかし、いわば人生で言えば大学入試のよいうな、『近代化』というたった一つの基準から考えて、その民族の資質、あるいはその歴史全体の優劣を議論できるかに ついては疑問があります」(二四七頁)。いみじくも「近代化の神話」という章名が示すように、近代化というのは一種の神話であることを認めています。しかも知的柔軟性を示すかのように神話への多少の懐疑すら表明しています。ところが結論的には、「しかし、歴史をここまで見て来ますと、日韓のアンティパシー、コンプレックス、すべての感情的摩擦の原因は巨視的に言えば、近代化が早かったか遅かったかのちがいに集約されるようです。これは日韓だけの問題でなく、過去二世紀の地球上におけるほとんどすべての問題、即ち、帝国主義、植民地主義、人種差別、経済面でのいわゆる南北問題などにとどまらず、民族主義や共産主義の問題の相当大きな部分までが近代化の差——もっと端的に言えばその

結果生じた生活水準の差——に起因すると言つて過言でないと思えます」(二六六頁)という形で、生産力信仰の近代化論者であることの信仰告白を遺憾なく行います。従つてこのような信仰からする所の日韓相互のアンティパシー解消の処方箋は、「何と言つても根本的な解決は、韓国経済の近代化を進め、生活水準をできるかぎり日本に近づけることではないでしょうか」(二六八頁)ということになります。また複雑な在日朝鮮人問題に関しても、「韓国も、今ひと息経済成長を続けて、在日韓国人が何も蔑視に堪えて日本にいななくとも、韓国でもよい就職の機会があるようになれば、日本に残る居残らないということと関係なしに、蔑視観は自然になくなるのではないかと思えます。そうなれば、日本語しかわからないで日本に住むほかは選択の余地のない人でも、同様に差別の対象ではなくなるのではないかという気もします」(二六八頁)というわけです。現実の処方箋は、在日外国人の指紋捺捺問題一つをとつても、問題は日本人側や日本国家の側にあるのであって、それほど問題が単純でないことは岡崎久彦氏自身が御存知だろうと思えます。私に言わせれば在日朝鮮人問題は、在日朝鮮人をそのように扱う、日本国家や日本人自身の問題であつて(ことに異民族・異端者に排除的なその単一民族国家的幻想)、在日朝鮮人自身には何らの責任はないと思うのですが、在日朝鮮人問題を日韓関係の癌視

する氏にはこのような単純化した近代化論的処方箋しか思いうかばないのでしょう。このような論理からする日韓關係論は、ただひたすら韓国近代化援助論、韓国經濟援助論ということになります。

「そして、この經濟發展に日本が積極的に手を貸すことは必要なことです。韓国經濟の安定と繁榮を助けることは、日本の安全保障の上でも、外交の上でも、また經濟的・人道的見地からも、それぞれの政策論の上で充分成り立ち得る政策と思うのですが、それはさて置いても韓民族は、日本の助けがあってもなくても早晩は日本との差をつめなければおかない意志と能力をもった民族なので、それを助けるのはたった一人の親類の国である日本であるという風に考えるべきではないかと思えます。そして韓国の近代化の最後の仕上げに日本が手を貸したということが、日本に対する韓国の怨恨をも最終的に過去のものとすることを期待するものであります」(二七四頁)。このような論理が、現在日本政府がおし進めている対韓政策の巧妙かつ露骨な擁護イデオロギーであることは論をまたないでしょう。現実には日本企業の対外投資行動の一つの選択にすぎない対韓国投資が、巧妙に護教論化され、現実には外交問題化している韓国側の対日貿易赤字問題や先端技術導入問題は、「感情問題にならないようにスマートに妥協で処理して行き、協力できることは何でも協力し

て行くということ、韓国近代化の最後の仕上げを温かい眼で見守るのが正しい態度」(二七六頁)ということになるかと思えます。しかしここには明らかに外交官特有の外交辞令があります。現実の外交政策をみていみると、本音は政府が協力できないことは民間ベースで処理せよということになりそうです(例えば『現代コリア』二四四・二四五、在大韓民国日本国大使館一等書記官松本厚治氏の論文、「日韓經濟關係を考える『貿易逆調』論の検討」)。

やはりこのあたりが日本国の国家公務員としての岡崎久彦氏のたてまえと本音の限界かとも思えますが、もう一步踏みこんでこのような原則的な考え方をグローバルな規模での南北問題全体に適應することが可能かということを考えてみれば、アングロ・サクソン協調論(後述)に立つ岡崎久彦氏の矛盾はあきらかです。いまや外務省の調査畑で長年きたえたというアングロ・サクソン協調論を持論とする「現実主義の」国家戦略論を検討しなければならぬことになります。

三

『隣りの国で考えたこと』のあとに出されたものが、『国家と情報——日本の外交戦略を求めて』(文芸春秋社)という本でした。いずれも最初の発表舞台は、文芸春秋社の『諸君

／＼であつたことは注目しておいてよいかも知れませんが。この本もサントリー学芸賞などといういささか悪酔いしそうな賞をうけているそうです。ところでこの本でもっとも頻出するキーワードは、現実主義という単語でしょう。本書における氏の主題を一言で要約すれば、一九三〇年代からの超国家主義的世界観や、戦後の観念的平和主義の軛を離れて現実主義の上になつた情勢判断に徹すべきだということのようです。その現実主義とは、「外交とか防衛とかの対外政策には相手があるのだから、世界はこうあつてほしいとか、こうあるべきだとか、日本が一方的に言つてもどうなるものでもない。とくに日本程度のサイズの国では国際政治の主役でさえない場合が多いのだから、一ばん大事なことは、日本を取りまく情勢を、希望的観測や感情論や主観的願望から離れて、まず、あくまでも客観的に見きわめることである。そして、日本がその中でどうしたら良いかという国家戦略も、緻密な情勢判断からおのずと生れて来るということである。私の持論の国家戦略であるアングロ・サクソン協調論にしても、国際情勢と歴史の流れを見きわめて行くと、それ以外にどうしようもないではないか、と言つているだけのことである」(二三三頁、あとがき)ということになります。寄らば大樹のかげ、強いものにはまかれろ式のきわめて受身で保守的な外交戦略であることがうかがえます。もしこのような論理に

イデオロギー性がまったくないものだと仮定するならば、かに極東におけるソ連の覇権が成立したならば、論理的には対ソ協調論がなりたちうるはずですが、「共産圏の一国となる選択はまず除きたいと思ひます。理由はもう挙げる要もありませんが、これは国民の八割以上を占める中流以上の意識を持つどの家庭にとつても、今よりも幸福でも、自由でも豊かでもない状態と想定されるからです」(七〇頁、隣接する強大国・ソ連)との極めてイデオロギッシュな拒否を示すこととうかがえるように、脱イデオロギーの現実主義ではありません。むしろ極めて価値選択的でイデオロギッシュな現実主義だと申せましょう。

勿論、このような現実主義は、日本がアジアの盟主であるというような戦前的な錯覚におちこむことへの抵抗とはなりません。単なる対米協調外交では力によつてソ連を封じこめようとするレーガン軍拡、それに伴う日本の軍拡への歯止めにはならないでしょうし、また、岡崎氏はその立場ではありません。アングロ・サクソン協調主義は、近代ではイギリスとの、現代では当然アメリカとの協調ということになるでしょうが、それは現代において正しい選択なのでしょう。岡崎久彦氏のイワシの頭も何とやら風のアングロ・サクソン信仰は、ここ三〇〇年ほど『戦略的思考とは何か』では四〇〇年となつています。九四頁)の近代の歴史でアングロ

・サクソンは大きな戦争に負けたことがない、アングロ・サクソン支配は絶対であるというような歴史認識に根ざしたもののなのでしょう（アングロ・サクソン論再訪、ことに一七二頁）。しかしグレートブリテン北アイルランド連合王国（イギリス）の成立過程と共に発生し、現在も続いているアイルランドの反乱や、ベトナム戦争におけるアメリカの敗北などについては、氏はどのように考えているのでしょうか。また日本の総資本の立場から考えるなら、シベリア開発であれ、中国の近代化への協力であれ、資本の論理として得になるのであればどこでも仲よくするということ、福田政権期のいわゆる全方位外交的な戦略の方が有利だと思えるのですが、岡崎氏のアングロ・サクソン協論は、ソ連を仮想敵とすることから自らの手をしばることにならないのでしょうか。等々様々の疑問がわいてきます。いくつかの疑問は、あとで「戦略的思考とは何か」を検討する際にもう一度考えてみることにし、本書の興味の一つである、氏独特の北朝鮮・金日成政権安定論、韓国の国家主義者・朴世熙論を簡単にみておきましょう。

まず、北朝鮮の体制については、「国民に外部の世界を知らせないとか、そういう議論は別にして、事実の問題として政府の政策を支えてゆくのに十分な一般民衆の支持のある体制ではないかということです。それは社会主義体制であっ

て、インテリと無産階級の結合、それも、革命意識の高いインテリと階級意識の極めて強い無産階級の結合によって生まれた、つまり社会主義政権として最良の基盤の上に立った政権ではないかということですが」（七八頁）と一氣に権力本質論的な規定を行います。その上で北朝鮮の社会主義体制の目標を、「北朝鮮は、世界でも稀な鞏固な基礎の上に立つ社会主義体制で、その目標は、統一された朝鮮半島全体において、両班、地主、富裕階級、日本人、アメリカ人の『搾取』から解放され、ロシア人、中国人からも干渉されない、プロレタリア独裁の社会を建設することにあると言えます。これは植民地時代以来、あるいはもっと溯って十九世紀末以来、朝鮮半島の左翼インテリと反体制的庶民が夢見て来た理想と言えます」（九六頁）とかなり閉鎖的な極彩色に描き出します。この論文の出発点は、韓国の反共体制を理解するために、北朝鮮が価値指向において日本や韓国といかに違うのかを描きだせばよかったわけですから、その意味では十分に目的を達しています。その上で日本と北朝鮮の国交の条件を、「相互理解、あるいは、少くとも相互の立場の承認は国家と民族の関係の最低の条件です。何時の日か北朝鮮と日本の関係が調整される時があるとして、その場合は、日本が自由民主国家であること、日米安保は堅持すること、韓国との友好関係を損う意図は毛頭ないこと、韓国を含むアジアに対する

米国のコミットメント堅持を支持する、という日本の立場を認識して貰うことが最低条件です」(九七頁)とあるように、日本側の条件が何ら変わらないことを前提に、相手方の一方的な承認を求めていきます。従ってこれらの条件は氏のいう現在の「北朝鮮政府の本質」からして承認不可能なことでしようから、結論的には、「予見し得べき将来において、現状と同じような対応が必要とされると覚悟している方が安全であり、かつ冷静な判断」(九八頁)ということと現状固定の論理となります。しかし体制の違いが外交関係にとって何らの障害にならないことは、日本と東・西ドイツや中・ソの関係を考えれば自明のことでしょう。問題は日韓関係の関数としての北朝鮮問題のあり方にあります。

「国家主義者・朴正熙の死」という一文は、韓国の朴正熙大統領の死(一九七九・一〇・二六)を追悼する墓誌銘として書かれています。原題が、「国家主義者の死朴正熙とドゴール」とあるように、朴正熙をゴーストとしてとらえ、民族精神の改造と平等主義をとなえた民族主義者、国家主義者としてとらえています。書かれた時点は一九八〇年の早い時期のようですが、すでに全斗煥少将(当時)の七九年一二月一二日の肅軍クーデターをふまえ、韓国は北朝鮮の存在がある以上、「国の安全保障を最重点に考えること、反共政策を維持すること、軍の支持があること」(一九九頁)を絶対条

件としてあげています。その意味ではその後の全斗煥政権の登場を予想したといつてよいと思います。しかし、岡崎久彦氏の一国ごとに見ていくような、このような方法では、朝鮮半島の既成の枠組や力学を固定しようとする力とこれをうち破ろうとする力の総合的なあり方はみえてこないように思えます。朴政権の末期に、アメリカのカーター政権は、中国の影響下に北朝鮮との接近を図ろうとしたこと、それに対して朴政権は対ソ接近というカードで対抗しようとしたこと等々は、韓国の一国際政治学者によってすら分析されているのに(金学俊『朝鮮半島の分断構造』「米韓関係とソ連」一九八四年)情報分析を担当する岡崎氏のこの著書には一片の言及もありません。本書で岡崎氏はソ連論や、中国論などもやっておりますが、ソ連に関しては軍事力のみ分析、中国に関しては政治分析偏重というような、それぞれの各論における一国的な方法の偏重を犯しています。もし岡崎氏が意識的に、そのような偏重をしているのでなかったとしたらこのことは、日本の国益第一を考える「やわらかな」国家主義者としての岡崎氏のもつ発想的限界であるような気がしてなりません。

現在、朝鮮半島では、互いに相手方への影響力を相殺することを目的に、韓国は中国・ソ連との接触を求め、北朝鮮はアメリカ・日本などとの接触を求めていることは公開された外

交声明などを通して周知の事実でしょう。また韓国も自国の防衛上アメリカに「駐留してもらっている」とはいえ、本音の所ではアメリカの対ソ前進基地にされてヨーロッパや中東に対する第二戦線等にはされたくないでしょうし、北朝鮮も中国やソ連の言いなりならず、自主・独立路線を歩んで来ていることは岡崎氏自身も認める所です。それが小国の理性というものでしょう。大国のエゴイズムの犠牲にはなりたくないという小国の動きが、国際関係の動態を生みだしていくような関数論的な動態分析の方法が岡崎氏にはありません。岡崎久彦氏の考え方の枠組とそのような静態的な方法論を端的に示しているものが、氏の『戦略的思考とは何か』であるように思えます。最後にその枠組の批判と欠陥を指摘することで結論にかえることにします。

四

現実の経済分析と運用を行うに当たって、静態的な限界効用学説(均衡論)一本やりでは、いかに合理的な説明が可能であるろうとも、非市場的な動きも含む現実経済では危険なやり方であるのと同様、世界の静的な軍事バランスや米ソの軍事力のパリティ(同等)のみで国際政治が動いていないことは、恐らく実務者の岡崎氏自身が一番よく御存知のことだろうと

思います。しかし戦略の初歩を知らない、頑迷なる日本の「観念的平和論者」(岡崎)に戦略論を教えさすとす情熱にでもとりつかれているのでしょうか、あたかも戦後の防衛論争にけりをつけるかの意気ごみで、氏はまさに経済学の初歩を教えるかのように、日本の歴史と地理から論理的に日本の戦略的環境を説いていこうとします。

本書は一九八二年の四月から、『文芸春秋』に一年連載したものを、加筆訂正してまとめられたもの由ですが、確かに用意周到なものであることは疑いようがありません。前半の五章で、主に第二次大戦前までの日本の戦略的環境を叙述し、後半六章の「デモクラシーで戦えるか」から第二章の「総合的防衛戦略」までは、イデオロギー問題、第三世界論、中ソ対立から核戦略の問題、核の手づまりによる妥協を求めての戦争としての通常兵器を使用した暫定協定^{トリス・イェン・イェン}戦争の可能性、有事立法の必要性の強調から台所の食料備蓄の問題、防衛戦略としての陣地戦の提起まで、文字通り防衛に関する様々の問題を総合的に論じています。全体に軍事リアリストのよび名が示すように、かなり軍事戦略的な発想からの歴史認識や政策論が中心です。

前近代の東アジアにおける伝統的均衡をバックス・シニカ(中国の圧倒的優位で平和が保たれている状態)として説きはじめ(もっともこの説自体は現在のアジア史の研究からは異

論が出しえるとは思いますが)、日清戦争(一八九四年)がその伝統的均衡をうちこわしたと、日清戦後の朝鮮・満州をめぐる日露の対立と日露戦争によるその「解決」(一九〇五年)が、日英同盟(一九〇二年)のアングロ・サクソン協調路線による辛勝であつたにもかかわらず、勝利に酔いしれた国益主義がその戦略的意味を忘れて満州をめぐる中国ナショナリズムやアメリカとの衝突をひきおこし、日露戦後四〇年にしてついには大日本帝国の没落を招いたこと、そして同時にヨーロッパでおきたナチス・ドイツの没落によって、第二次大戦後はヨーロッパや極東でアングロ・サクソン(アメリカ)とスラブ(ソ連)の二極構造が成立したのだということが、明快な論理で描かれています(前半五章までの戦前の日本をめぐる戦略的環境の叙述)。岡崎氏にこのような歴史認識が可能であるのは、「国家の行動」というものは畢竟はそれぞれの国の国家利益によって左右されるものであり、一見イデオロギーの対立の結果のように見えても、すべてパワーポリティクスで説明できる」(二〇九頁)と考えるようなパワーポリティクス論者、国家主義者としての合理性をもつからでしょう。これは氏の強味であると同時に、弱みでもありません。

強みという点では、たしかに大きな枠組としてイデオロギー的な「ファシズム陣営対民主主義陣営」の史観では戦後の

米ソの対立は解けませんし、また共産主義陣営対資本主義陣営の対立だけでも、中ソ対立や、米中接近、中越戦争などの戦後の問題が解けないことを冷静に認識している事実でしょう。戦後の現実の世界は、社会主義・資本主義のイデオロギーを問わず、まず一義的にはそれぞれの国はそれぞれの国の国家利益を中心に動きたいし、動いているのだとする方が、何を国家利益とみなすのかという吟味は必要であるにせよ、リアルな認識であることはまちがいないでしょう。従つてこの認識を徹底すれば、小国なりといえども自国の国益を中心に尊重する限り、大国のおもわく通りには必ずしも動かないという結論に導かれそうな気がするのですが、核戦略を含む岡崎氏の軍事リアリストとしての世界認識はそうではありません。

岡崎久彦氏は、戦後の分析に際しては、ゴースト的なその思考の枠組を微妙に修正します。つまり、日本はアメリカ的な自由と民主主義のイデオロギーは守らなければならないし、また守ることができる、そのためには対米協調しかありえないし、ましてや中立政策などはありませんというものでした(第六章、デモクラシーで戦えるか)。その根拠は、「現在ででき上がっている国際的な政治経済体制では、先進民主主義国は運命共同体だということは充分言えます。……米国を中心に現在の先進民主主義国間との協調体制の中におい

てのみ、現在の高い生活水準も自由も享受できることは自明のことです。したがって、もし戦争があれば、先進民主主義国側が勝って、戦争のあとはいまのような国際的な政治経済体制が復活することを希望するのは当然（一二二頁）というものです。これは、現在のアメリカを中心とした西側の世界支配体制を、アメリカの同盟国として「運命共同体」的に擁護する論理であることは論をまたないでしょう。このような論理は、アメリカの国益と日本の国益が一致するという論理構成でなりたっています。果たして本質的には国家主義者である岡崎氏に何らの抵抗感もないものなのか、疑わしい気がします。恐らくその背景には、現在の米ソの圧倒的な核支配の前に、中小の国々はどちらかの側につかざるを得ず、どうせそうなら積極的に極東におけるアメリカの代理人になられた方が得だという、保守主義と現実主義があるのでしょう。しかも米ソ両超大国は互いに睨み合ったまま、互いに相手にまけないよう核はどんどんふえていきますから、そのあまりの巨大さの故に核は一種の禁じ手のような存在となつて（核の戦略）、かえって通常兵器による暫定協定戦争の可能性は高まるので、極東が米ソ対決の世界戦略の中での弱い環にならぬよう、現在の自衛隊の強化、装備近代化を急がねばならない（日本の同盟戦略）と現在の日本の軍拡を肯定していく論理を展開します。

ここまでくると、米ソの核支配のもとで、世界中を非生産的な通常兵器のガラクタおもちゃ箱にしてしまいかねない岡崎氏の論理に、何やら異常さを感じるのですが、これはとりもなおさず核恐怖の時代の異常さなのかも知れません。一見常識を尊重し、保守主義と現実主義の合理性を尊ぶ国家主義者の理性も、このあたりではさめた狂気をすらはらんでいきます。そのような目で本書をながめてみますと、国家主義者としての合理性の様々の弱点と限界がみえてきます。すでに紙幅の余裕がありませんので詳細はできませんが、「バックス・シニカ」の時代ならともかく、現代においても「朝鮮半島南部の戦略的重要性」を云々し、「結局は今も昔も同じことで、半島南部の海空軍基地が非友好的勢力の手に陥ちた場合を考えると、日本が追加的に必要となる防空能力、制海能力、揚陸阻止能力、ひいては日本の防衛体制全般は、現在のものとは質量共に抜本的に異なるものとならざるをえない」（二四頁）と本質的には釜山赤旗論と同質の反共主義をむきだしにします。

岡崎久彦氏は国家公務員として、平和憲法が求める非核三原則や海外派兵の禁止などにしぼられていることは事実です。従って岡崎氏の発想も、現政権が認めている憲法のワク内での専守防衛という発想でそれなりに一貫しています。しかし戦略家の岡崎氏としては、日本防衛のための対韓経済

援助、ひいては軍事援助、有事立法の制定などのぎりぎりの所まで踏みこみたいという意欲はありありとうかがえます。その際にもっともめざりなものは、日本国民の間に広く存在する反戦平和志向でしょう。この本でも、反戦・平和論者は、主観的にはどうであれ、ソ連の戦略を有利にしているのだということが、いまいまいしげにあちこちに書かれています。このような発想からは、日本の資本力をソ連のシベリア開発に役立て、対ソ和解の上に領土問題を解決しようというような発想は、ロシアの膨脹主義の前には「論理的には逆筋」というような見解となつて懐疑的です（五五頁）。おそらく岡崎氏にとってはこのような発想も、ソ連の戦略を知らない容共主義者のたわ言ということになつてしまふのでしょう。またその他にもアメリカのベトナム戦争における敗戦も、岡崎氏に言わせれば、第二次大戦後の米ソの勢力確定の最後の決着（一三七頁）として説明されますし、ベトナム（南）を助けようにも助けようがなかった、アメリカにとっては「ベトナム戦争を大事な戦争だとアメリカ国民に納得させることができなかつた」（一一八頁）からだとして説明されています。『隣りの国で考えたこと』で示されたような、アジアの国々にとつての独立の大切さという観点からベトナム戦争を考えようという姿勢はまったくみられません。その他、中国との同盟やアジア主義を弱者同盟（では大多数のアジアの非同盟

中立国の路線はどうなるのでしようか）だとして戦略上の最大の危険視をしたり、戦前の満州問題をフランスのアルジェリア問題として比喩する発想はあつても、朝鮮問題にはまったくそのような発想がなく、それどころか、「帝国主義が他の民族に犯した罪の評価は別の問題として、日本が朝鮮を併合しえたのは、英、露、米のそれぞれから、併合しても文句は言わないという了解をとりつけた上だったからです。それに反して満州に進出して、結局は大日本帝国の破滅を招いたのは、米は終始反対、英は一度も支持せず、満州折半を約束した帝制ロシアは滅んでしまったのに、独りで強引に出つていったからです」（二五〇頁）というような論理で、日米同盟（アングロ・サクソン協調）のような強者同盟の歴史的根柢にしているような国家主義者の歴史像には、根本的な哲學の欠如を感じないわけにはいきません。

今日、アメリカの核戦略には、共倒れをも辞さないぞというアメリカの非合理性（核のおどし）によつてのみ核の抑止がかるうじて保たれているのだとする理論すらあるそうです。私どもは国家合理主義の果てに非合理的な狂気をすらはらんだ軍拡主義の大国のゲーム理論をもてあそぶ国家理性に信頼がおけない以上、そのような大国に無条件に追従して行かざるを得ないアングロ・サクソン協調路線の一見合理的な戦略にも懐疑の目をむけざるを得ません。国家主義者達の側

に、もはや核の手づまりの現実を打開していくような合理的な理性が失われているとすれば、やはり草の根の市民の側にこそ世界の平和を生みだしていく攻めの平和運動の論理が要請されているといえましよう。

一見合理的な、国家を守るという視点から出発した現実主義・保守主義の国家主義が、極めて非合理的な軍拡路線を歩まざるを得ない今日、国家の側からは一見非合理的な、武器廃絶の平和戦略を世界市民の側こそが構想していかなければならないでしょう。その意味で立場こそ違え、岡崎氏ら軍事リアリスト達の足かせとなっている日本国民の反戦平和志向や、反戦平和運動こそがいかに大切な宝物であるかということをお教えて頂いた点で、深く岡崎氏の著作に感謝するものです。この上は単に平和を守れというような受身の反戦平和論ではなく、世界に反戦平和を生みだしていく攻めの平和戦略を構築していくことこそが、何よりも日本の国家や市民に要請されている点ではないでしょうか。

一九八四・一一・七、レーガン再選の日に。

(付記) 執筆の過程で『情報・戦略論ノート』(PHP、八四・一・二)という講演・エッセイなどを中心とした岡崎氏の新著を得たが、軍拡路線のイデオログとの印象をさらに深めるものでこそあれ、何らの論旨の変更の必要性は認められなかった。

投稿へのお誘い!

編集委員会は、皆様の力作の投稿を心から期待しております。

『歴史評論』は、編集委員会のたてた企画にもとづく依頼原稿と、皆様からの自発的な投稿原稿とでつくられています。これからも意欲的な企画をたててゆきたいと思いますが同時に一つの研究会の機関誌である以上、投稿原稿も尊重されねばならないと考えております。科学的歴史学の豊かな発展のためにも、それは是非とも必要なことであります。

研究論文、研究ノートをはじめ科学運動にかかわるニュース、掲載論文に対する批判等々、自発的な投稿を心から訴えるものです。

投稿規定は、研究論文・研究ノートは一〇〇枚(二〇〇字換算、縦書き、図表は三枚以内厳守)の規定となっております。

なお、コピー原稿は御遠慮願います。投稿していただきました原稿は、編集委員会において速やかに審査し、三カ月以内に結果をお知らせします。

『歴史評論』編集委員会